



#03

# 出会いはまるで稻妻のように

著: 藍澤たすく

イラスト: (元: 改め)かもめ遊羽



リョウはコンビニの前に立っていた。

何か用事があるわけでも、待ち合わせがあるわけでもない。ただ単に、ぱーっと立っていた。彼から5メートルほど離れたコンビニの駐車場には、見るからに軽薄そうな茶髪・ピアスの若者が数人、うんこすわりでたむろしている。いつもの、見慣れた光景だ。そしてリョウは彼らとは関わり合いにならないように、極力気配を消してぱーっと立っている。夏の香りを漂わせ始めた日差しが少しだけ肌に痛い。

女の子がやって來た。

地元の高校の制服を着ているからこの辺の子だろうが、リョウは初めて見る顔だった。鳶色の瞳、長い睫毛。サイドで結ばれた艶やかな髪。すっと通った鼻梁と、きりりと引き結ばれた唇。どこか凜とした雰囲気を纏つたその少女は、文句なしの美少女だった。

「よー、姉ちゃん まぶいじやん。俺達と遊んでかねー?」

鼻ピアスが死語満載のナンパを仕掛けるが、少女はガン無視してその前を通り過ぎようとする。

「おい、ちょっと待てよぶぎつ?!」

ひゅつという風切り音がした瞬間、鼻ピアスのこめかみに少女のハイキックがめり込んでい

た。鼻ピアスはそのまま音もなくその場に崩れ落ちる。

「て、てめえ、ぼごつ!?

「女だと思つてぐはつ!?

「た、助けてくれんざいむつ!?

正拳突きに膝蹴り、そしてまたハイキック。少女はあつという間に不良全員をKOしてしまった。

あまりの展開にリョウは呆然と立ち尽くす。  
そして思つた。

ハイキックの時、都合2回見えた青の縞パンはめちゃ眼福であつたと……。

不意に少女は振り返り、リョウをきつと睨みつけた。そしてそのまま、つかつかとリョウに歩みよつてくる。

（えつ……俺? なんかまずいことした? ……まさか今、俺「縞パン最高」とか声に出して言つてたとか!）

パニクるリョウの眼前に少女は迫りつつあつた。

そしてリョウの目の前に立つた少女は、ただ無言でじつとリョウを睨みつける。

真剣な眼差しだった。

リョウはテンパっていた。正直、同じ年頃の少女と話した経験など片手で足りるぐらいしかないのだ。こんな時、なんと言えばいいのか、リョウはまったく判断なかつた。

どうしよう。何か気の利いた言葉、気の利いた言葉、この場に合つた言葉……。

「イラッシャイマセ」

最悪だあーーー！

リョウは口を衝いて出た自分の台詞に絶望した。いやむしろ死にたくなつた。

なんだよ「イラッシャイマセ」つて！

俺、こここの店員じやねえし！

しかも緊張して声、裏返つてたし！

ああああ、穴がなかつたら掘りたい！ 掘つてでも入りたい！

しかし心の中で七転八倒するリョウをよそに、少女は変わらない様子でリョウを見つめ続けている。

……あれ？ なんか様子がおかしくね？

そして少女はそのまま、小さな白い指先をリョウの身体の上に這わせ始めた……？  
右から左、左から右……。

悩ましげな表情でリョウを指先で撫で続ける少女。その真剣な瞳で、リョウを変わらずに見つめている。心なし、その頬も赤い。

これは、あれか？

もしかして、この子、俺のこと好きなんじゃ……。

いや、まさか！

バン！

突然リョウは胸を叩かれた。

何のことか判らず、リョウは硬直する。

二人の間に、完全な沈黙が訪れた。

バン！

バン！

間隔をあけて少女が同じ場所をまた叩く。

え？ なに？ これはどういうこと？

言葉にならない想いを俺に伝えてるってこと？ そうなの？ そういうことなの！？

……よし、そういうことなら俺も男だ！

君の気持ちに応えて、今、とびきり熱い抱擁を……！

ドガツ！

リョウの目に本日3回目の編パンが映つた。と同時に、彼の意識がブラックアウトする。なぜなら少女のハイキックが、リョウのこめかみに深く深くめりこんでいたからだ。

少女はびくりともしなくなつたりョウをしばらく観察したあと、あきらめたよう息をついた。そしてそのままコンビニに入り、開口一番、こう大声をあげたのだ。

「すいませーん！ おもての自販機壊てるみたいなんですけどーー！」

コンビニの自販機に取り憑いてはや15年目の付喪神・リョウ。

彼が人間の気持ちを本当に理解するのには、まだまだ時間がかかりそうだ……。

おしまい